opusdei.org

人生の主役

反射にする反応についる 反がそうででででいる を説しているというでででででででいる を説している。 ではいるででででででででででででででででででででででででででででででできます。 というにはいる。 にいりにでいるが多いでででできる。 というにでいる。 にでいるのでででできませる。 にでいるできませる。 にでいるできませる。 にでいるできませる。 にでいるできませる。 にでいるできませる。 にでいるできませる。 にでいるできませる。 にいるにないる。 にいるにないる。 にいるといる。 にいると、 にしる。 にしいると、 にいると、 にいると、 にいると、 にいると、 にいると、 にいると、 にいると、 にいる

2015/02/04

「君たちにお願いしたいことは、よりよい世界を作るという任務に取り 組むことです。愛する若者たち、ど

うか人生の解説者になるのではな く、主役になって人生を築いて下さ い。イエスは世界の外から人々を観 察したのではなく、その中に入って 行かれました。君たちも同じように して欲しいと思います」(教皇フラ ンシスコ、2013年7月27日の講 話)。教皇様はこのように若者たち に要求された後、すぐに問われた。 「では、どこから始めようか。これ を始めるように誰に頼めばよいの か。君たちと私からだ。一人一人、 再び沈黙の中で、自分に尋ねるの だ。もし私から始めねばならないの なら、どこから始めようか、と。一 人一人が心を開き、イエスから答え に耳を傾けよう」と。世界の歴史を 動かす人になりたければ、まず私た ちが自分を作り上げる必要がある。

自由と制約

自らの人生を作り上げようと主張することは、人格というものは家族や

け、現実に対して一定の態度を取るようになる。それゆえ、ほとんど反射的にする反応について、なぜそういう反応をするのかを説明するとき、「私はもともとこう言う人間だから」と言うより、「私はこのように自分を作り上げたから」と言うべきである場合が多い。

人間は多くの場合どうしようもない 制約に縛られている。例えば、生ま れ育った家族や社会、人の可能性を 狭める病気や障害など。それらを直 すことは普通は無理だが、それらに 対してとる態度を変えることは可能 である。なかでも神はすべてを配慮 して下さることを思い出すなら。 「イエスは、特に恵まれた人々にだ け向かって話しかけられたのではな く、神の広く大きな愛を証すために 来られたということを絶えず繰り返 して教える必要があります。人はみ な神に愛され、そして神は、全ての 人間から愛を待っておられるので

す| (『知識の香』110)。どんな 状況の中でも、たとえ大きな制約の 中でさえ私たちは神と隣人に、どん なに小さなものに見えようが、愛の 業を差し出すことができる。苦しみ の中でのほほえみ、十字架と一致し て主に捧げられた苦痛、逆境を忍耐 強く受け入れること、これらがどれ ほどの価値を持つことか。苦しみ も、孤独も、人々から忘れ去られる ことも、裏切りも、中傷も、肉体的 精神的苦痛も、死でさえも、すべて を愛しようとする人の愛に打ち勝つ ことはできない。

自分の人生の作者になる

人はやる気さえあれば、自分の才能 一徳、能力、競争力一を発見し感謝 し、それをできるだけよく使おうと することができる。しかし、キリス ト教的な人格を形成するのに最も大 切なのは、人の最も深いところに影 響を及ぼす神の賜であることを忘れ てはならない。この賜の中で、神の子の身分という巨大な賜が際立っている。この賜のおかげで、父なる神はわたしたちのうちにイエスキリストの像を一制限された仕方であるといえーご覧になる。それは洗礼によって与えられ、堅信によってもれ、取信によってもかいの秘跡と、なかでも御体と御血の拝領によってますますけらかに現れる。

14)。私たちも、もしそう望むなら、嵐や困難の中でも車のハンドルをきって進むことができる。

私たちが自由であることを意識するとき、何かしらの不安を感じることもある。失敗したらどうしよう、と。しかし、自由であることはなんといっても喜びではなかろうか。

といっても喜びではなかろうか。 「神は人間を自由な存在としてお造 りになったとき、危険な冒険をされ たということができます。私たちが 心から望んだ生き方をするように、 お望みになったのです」(聖ホセマ リア『信仰の豊かさ』1969年11月2 日のABC紙に掲載)。この冒険の 中で、私たちは一人ぼっちではな い。まず神ご自身の助けがある。次 に家族や友人、さらにはたまたま人 牛の涂上で出会った人の協力もあ る。自分の人生の主役になるという ことは、多くの面で周囲に依存して いることを否定する事ではない。そ してこの依存が相互であると考えた

なら、私たちは互いに依存し合って 生きている存在であるということを でおる。それゆえ、自由として だけで足りるのではないためにして だけでとのためにもししわて を偉大で、内容のない空虚なら、内容のない見るに、 い下がる。次に見る、別の言い は捧げるためにある、別のと はするないのだ。

多様な歩み方

聖ホセマリアは、スペイン内戦の直後にバレンシアの破壊された標語で見ていた張り紙に書いてあった標語の力をはいるというものというもので見ない。それは「旅人よのである。を進め」というもので生きる。「右側でも、ジグでもる。「右側でも、ジグでもない。神の道を行く行き方でも構わない。神の道を行く行き方

は無数にある」(聖ホセマリア、1945年2月2日の手紙、19)。一人一人が自分の聖性の劇の主役である。 一人一人が、周囲の出来事に流されるままになることを拒むなら、人生のあらゆる段階で自己の存在と人格を独自の仕方で作り上げていくことができる。

「重ねて言いますが、奴隷のように ではなく、自由な子として主のお示 しになった道を歩みます。自由で軽 快な歩みを神の賜として味わうので す」(『神の朋友』35)。この爽や かさ、すなわち自己を支配する能力 は、自分の行動に責任を持つこと と、自分が神の作品であることを自 覚することと切り離されない。私た ちに応答を要求する無条件の愛を経 験するに従って現実になっていく神 に近づくという夢である。神の愛 は、私たちの自由を肯定し、その恩 寵によって思いも寄らない水準にま で高めてくれるのである。

神と隣人の助け

神のご計画によれば、人生は他人と 分かち合うようにできている。つま り神は私たちが互いに助け合うよう にお望みになった。それは日々我々 が目にしている。たとえば、人が生 きていくのに最も基本的なことでさ え、一人ですべてできるわけではな い。誰一人としてまったく他人との 関わりなしに生きていくことはでき ない。より深いところに目をやれ ば、人は誰かに心を開いて、人生を 共有し、愛し愛される必要を感じて いることがわかる。「だれも独りで 生きることはありません。だれも独 りで罪を犯すのではありません。だ れも独りで救われるのではありませ ん。他の人の人生は、わたしの人生 の中に入り込み続けています。わた しの思い、ことば、行い、なし遂げ ることの中に入り込み続けていま す。逆にわたしの人生も他の人の人 生の中に入り込みます。そして良い

結果も悪い結果も生み出します」 (ベネディクト16世『希望による救い』48)。

他人に心を開くというこの自然な傾 きは、イエス・キリストの救いの計 画において最高の働きを見せる。そ れが『使徒信経』で唱える「聖徒の 交わりを信じます| という信仰であ る。それは教会の信者間の交流を指 す。霊的生活においても他の人々の 助けに頼らねばならない。信仰を受 けたのは両親やカテキスタを通じて であるし、秘跡を受けるのも教会の 奉仕者がいなければ不可能である。 また信仰における兄弟から霊的な助 言を受け、祈ってもらうことも必要 である、など。

キリスト教生活において誰かに付き添ってもらっていることを知るのは喜びと安心をもたらすが、だからといって聖性に達するための本人の努力が免除されると考えてはいけな

他人の助けを必要としていることを 認めると同時に、霊的生活に下なられて、 ことを通して光とかを忘れてはなたりに、 のは神であるこれないのになるない。 信か場合も、なが続いなが続いてではないが を感じることがないがけるでいるのに、神が私においてでででででででででででででです。 その助けに深く感謝するとし、その助けに深く感謝するとも に、同時にその関係に縛られること なく大きな精神の自由を享受するの である。

無条件に愛する自由

キリスト信者であるわたしたちは、 人格の完成が神のやさしい御旨に対 して自由に全面的に答えることの結 果であることを知っている。私たち が受けた賜は、神の恩寵に対して心 を開くときに最も効果的に働く。そ れは無数の男女の聖人たちの人生を 見ればおのずと明らかになる。彼ら は主が自己の人生にお入りになるま まにさせるとき、その奉仕のために 自己を喜んで捧げることができた。 聖マリアはお告げを受けたとき、 「はっきりと『なれかし』とお答え になりました。これこそ神に自己を 捧げる決意です。最高の自由をもつ 人の返事です」(『神の朋友』 25) .

人間は神を目的として生きようと決 心するとき、最も価値あることに自 分の夢と力を傾けることになる。そ のとき自由の本当の意味を理解す る。自由は単に好きなものを選ぶこ とではなく、自己の人生を決定的に 捧げて、偉大なことのために使う能 力である、と。自分の持つ才能や資 質をキリストに付き従うために使う とき、他の可能性をあきらめねばな らないときもあるとしても、幸せ を、つまりこの世で100倍、あの世 で永遠の命を手に入れる。また、そ のことはその人が精神的に立派に成 熟していることを示す。なぜなら、 確信をもって生きることができる人 格を持つ人だけが、自分のすべてを 捧げることができるからだ。「だれ の強制も受けず自由に、自分で望む からという理由だけで、私は神を選 ぶことに決めました | と聖ホセマリ アは証言している(『神の朋友』 35) 。

過去と現在と未来を主にお任せする

神を選択した人はいかなる逆境にも たじろがない内的な平和をもって行 動する。「私は誰を信じたかを知っ ている | (一テモテ1・12)。これは 殉教を目前にして聖パウロが表した 信頼の言葉である。神を人生の土台 に据えるなら、揺るぎない安心感に 支えられるだけでなく、自己を隣人 に捧げることが可能になる。使徒的 独身の中であろうが、結婚生活の中 であろうが、他のキリスト教的な行 き方の中であろうが。これは現在だ けでなく過去も未来にも及ぶ献身で ある。「主よ、わたしの神よ、あな たのみ手に委ねます。過去も現在も 未来も、大きなことも小さなこと も、わずかなことも多くのことも、 この世のことも永遠のことも| (『十字架の道行き』第七留、 3) ,

過去を変えることは誰にもできな い。しかしながら、主は赦しの秘跡 において罪を赦すことによって、各 自の過去の出来事もきれいに再セッ トアップして下さる。すべては善の ためとなる(ローマ8・28)。私たち が犯してしまった過ちさえも、もし 神の憐れみに頼り、より神に目を向 けて生きようとするなら善に変化す る。こうして、信頼をもって未来を 見ることができる。私たちを愛して 下さる御父の手の中にいることを知 るからだ。神の御手の中にいるな ら、倒れても再び神の御手のなかで 立ち上がることができる。

神を選ぶと言うことは、神とともに 人生を作り上げていかないかと招待 されることである。謙遜に自由とい う賜をいただいたことを感謝しなが ら、多くの人たちと手を携えて神か ら任された使命を果たすために自由 を使うことである。そうすれば、神 のご計画は私たちの予想を遙かに超 えたすばらしいものであることを経験するだろう。聖ホセマリアがある若者にこう言っていた。「神の恩郡が働くにまかせなさい。 君の心が自身をみなさい。 (…)。 国本ではなずない。 (からながままにさせなさい。 (からながままにさせなさい。 (1974年6月29日の団らん)。

フアン・ラモン・ガルシア=モラ ト・ソト

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/jinseino-shuyaku/ (2025/11/19)